引用文献

「明日への扉（完全版）」、尊田望編纂、バハイ出版局、東京、2002年。
アブドル・バハ：「パリのアブドル・バハ講和集」．英語版から邦訳．日本バハイ全国精神行政会監修．東京、バハイ出版局、1976(1959)年．
――：エッセルモント、ジョン「バハオラと新時代」に引用、バハイ出版局、東京、1984年。
バハオラ：「かくされたる言葉」、訳日本バハイ全国精神行政会監修、バハイ出版局、東京。
――：「ケタベ・アグダス」．英語版からの邦訳．日本バハイ全国精神行政会監修、東京、バハイ出版局1993.
――：「バハオラの書簡：『ケタベ・アグダス』後に啓示（上）、東京、バハイ出版局、2003年。
新渡戸稲造：「武士道」。矢内原忠雄訳。東京、岩波書店、2004年。

私とバハイ(習字と音楽の関係から)

津堅伸一

私の成績はというと小学校は、可もなく不可もなくといった平凡な生徒だった。まあまあといったところだろうか。そして中学校に入ると、おちこぼれた。当時、成績の悪いものは私立の商業科の道へ進むのが一般的であった。高校は、それで私立の職業科（商業科）に入学。商業科から大学へ進むものは非常に少なく、大半は高校を卒業すると就職するのだが、努力の甲斐あって、大学へ行けることとなった。

大学のオリエンテーションで教職がとれることを知った私は教職員になる決意をしたのである。子ども好きな私にとって、教師という職業は大変魅力的な職業であり、バハオラも最も賞賛される職業のひとつであると述べておられます。しかし私の前に大きな障壁が立ちはだかったのです。教師になるのなら小学校の先生と決めていたのに、私の大学では中学、高校の教職員免許しか取れなかったのです。私の心の片隅に小学校のときの思い出が残っていたのでしょうか、中学時代や高校時代のほろ苦い記憶と対照的に小学校時代が純粋で平和で輝いていたように感じたのかもしれません。小学校の教職員になるという夢を諦めるわけにはいきませんでした。大学に入学したことで自分に自信がついたのだと思います。すぐに、小学校の教職免許を取るにはどうしたらよいのかと大阪の教育委員会に電話すると助言を頂きました。「卒業してから通信教育で免許をとりなさい。」

中学や高校と違い小学校の教職員免許は全科目を担当することになるので、音楽を学ぶ必要がどうしてもありました。それであるコーラスグループに参加することにしたのです。

思えばこの時からバハイの種は私の心に植え付けられていたのかもしれません。そして、そのメンバーのひとりが、あとからバハイを教えてくれることになるのです。(ただし１５年後)

そして小学校の教員になり、子どもたちと共に人生を歩むことになりました。子どもたちを取り巻く環境は時代と共に厳しくなってきています。個性や人間性を育むことを伝えるためには全力でぶつかっていかなくてはなりません。教師の仕事は真剣勝負です。子どもたちはとても敏感で些細な嘘や妥協も見抜いてしますのです。教師は大きな慈愛で子どもたちを正しく導いていかなくてはなりません。そして、子どもたちに試される出来事が起きたのです！

それは５年生を担当していた頃の出来事でした。習字の授業での一言がきっかけでした。「先生、へたやな～！」

それから、習字を習いはじめました。ゴールは、卒業証書に子どもの名前を書くこと。卒業していく

子どもたちを万感の思いをこめて、一人ひとりの名を刻み込んでゆく作業は教師として、最高の喜びであり、栄誉であり、祈りなのです。彼らの小学校時代の思い出が黄金色に染まるように…と。

去年の春の書道検定では3.5段だったので、目標を4段に設定していました。

去年のサマースクール山口と仙台のサマースクールで練習し、検定を受けてみたところ、なんと5段の認定を受けたのです。これには自分自身が驚いてしまった。

当初は「多分4段になれるであろう。目標が達成されたらどうしよう？半分、やめようかな」と思っていたのですが、バハオラが「続けなさい」とおっしゃっておられる気がしたのでしばらく続けることにしたのです。

また　今年は山口でのサマースクールでも教えることができました。書道は単なる書道ではなくなり子ども達の心と自分を結びつける新たな架け橋となったのです。

音楽と習字は非常に共通するものがあります。

強弱　　緩急　メリハリ

そして、バハオラのことを描くときが、一番　書に魂が入るのです。

「人類という家族の中の多様性は、愛と調和の源であるべきです。ちょうど、異なった音調がひとつに融けあって完全な和音となる音楽と同じようなものです。」　　アブドル・バハ

アブドル・バハ

アフリカの精神的再生：文化的環境的側面より

ジョセフ・ンガ

この発表は、アフリカの精神的再生と成長について、バハイの教えが及ぼしたインパクトについて研究するものである。これはバハイの教えがいかに伝統や社会の変革に影響し、いかに母なる大地に生きるアフリカの推進力を復活させたかを調べるものである。アフリカ人の多くは、樹木、鳥、山、花といった自然のシンボルが重要な文化的意味を持ち、深い精神的意味を伝える神中心の世界で生活している。日本人も、自然との共存を重要視している。アフリカで、医師、薬剤師、心理学者とも言え、地域社会の相談役、指導者でもあるハーバリスト（薬草を使った治療師）の父と共に重労働の農業に従事したことにより、自然と環境に目を開かれ、人間としての尊厳について考えた。

アフリカ人は愚かで怠け者であり、野蛮で原始的であるとして長い間、搾取され、抑圧されてきた。この苦しみはバハオラの出現によって変革された。バハイの教えは自然を比喩にして美を表現し、アフリカ人の文化的想像力に直接語りかけている。バハオラは、すべての創造物は神の啓示のしるしであり、その啓示そのものは神聖な春であり、その啓示を通して大地は実り豊かに花開くと言われた。アブドル・バハは愛の力や多様性の中の和合を、大洋の波、一本の木の果実、花園の花に喩えられ、アフリカ人の未来は輝いているといわれた。バハオラはアフリカ人の子孫を精神の光が輝く黒い瞳と結び付けられた。

ショーギ・エフェンディは2度アフリカを訪れ、アフリカの人々は世界文明の進歩に貢献するべく、目覚めつつあり、力のバランスは植民地を持った国から抑圧を余儀なくされた国へと移動するとして、アフリカの輝かしい未来を暗示された。人類の一体制の考えによってもはや肌の色で差別されることはなくなり、世界中の抑圧、搾取されてきた人々に世界の一員としての存在価値観を与えている。日本は伝統と超現代が巧みに組み合わされて発展しているが、精神性が高まればさらに発展するとアブドル・バハは言われている。世界平和確立のため日本人に託された期待は大きい。

全人類のよりよき未来のためにバハオラの教えを広めることが望みである。